

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：34316

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530606

研究課題名(和文) 近世 - 近代移行期における祭りのオーソプラクシー化と社会変動の研究

研究課題名(英文) The impact of modernity over the traditional festival in the transition period from Edo to Meiji era

研究代表者

吉田 竜司 (Yoshida, Ryuji)

龍谷大学・社会学部・教授

研究者番号：10291361

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)： 近世 - 近代移行期における曳山祭の変容に対する近代化のインパクトについて検討した。インタビューや資料収集による調査をおこなった全17祭礼のうち、明治期の動向がある程度追跡可能な3祭礼(山口祇園会、八戸三社大祭、鳥取東照宮祭礼)について比較検討した結果、祭りの神事としてのオーソドキシシーと神賑行事としてのオーソプラクシー、そして両者をつなげるインデックス性の3つの要素からなる祭りの意味論的構造が、近代化による価値体系と社会的資源環境の変容によって破壊されるか、あるいは刷新されるかによって、祭りの盛衰が決定されることが示唆された。

研究成果の概要(英文)： We investigated the impact of modernity over the viability of the traditional festival in the transition period from Edo to Meiji era. Among the 17 festivals we researched, in the 3 festivals we could follow the route relatively in detail. After the comparative investigation, we conclude that the viability of a traditional festival under the influence of modernity would depend on the preservation or the innovation of its inherent symbolic structure.

研究分野：社会学

キーワード：近代化 曳山祭 オーソプラクシー化 社会変動

1. 研究開始当初の背景

近代化についての基本的認識は、ウェーバーが「合理化」概念を提唱して以来基本的には変わっていない。近代化とは、合理的理性によって主導された「魔術からの解放」過程、あるいは「魔術」を合理的理性によって置き換えていく過程であるとする基本認識は、社会学のパラダイムであると言ってよいだろう。

しかし近年、この「合理化パラダイム」の再考を促すような研究動向がいくつかの分野から出されてきている。近年、日本史学において近世 - 近代移行期への関心が高まっているのもそのひとつである。それらは、近世社会のうちに近代の萌芽となるべき要素や、近代へと受け継がれていく要素を読み解くことで、近世から近代への時代転換の意味を問い直そうとしている。

そして、祭りもまた、近世 - 近代移行期の意味を問い直す指標となるべき重要な研究対象であるといえる。

だが、この祭りから近世 - 近代移行期を問い直すという問題意識に基づいた研究は、近世史に限らず、どの研究分野においても十分に着手されているとは言い難い。

そのなかで、社会学や観光人類学において、祭りと近代化という問題設定からいくつかの既存研究があるが、それらはおしなべて、「合理化パラダイム」のなかで論じられてきた。すなわち、祭りを前近代的な宗教文化現象として捉え、近代化を合理化(脱魔術化)過程として捉えることを前提とし、そうした前近代と近代の対抗関係のなかで、祭りがいかに合理化され、あるいは排除されていくかについて、もっぱら問われてきた。例えば、祭りの「日常化」や「イベント化」、あるいは「民主化」についての議論がそうであり、いずれも祭りに対する「合理化パラダイム」の適用のバリエーションといえる。

たしかに、祭りは近代との出会いのなかで合理化の圧力に晒されるが、いっぽうで祭り自身を合理的理性が容認できない方向(浪費、暴力など)へと活性化したり、国家的行事との奇妙な「習合」を引きおこしたり、さらには近代化自身が祭りの伝統回帰を促したりもする。事実、近代化の集約的表現の場であるはずの都市において、祭りが豪華さを極め、華美化の頂点に達する時期は、近世後期から明治・大正期にかけてであるとの指摘はしばしばなされている。これらのことは、祭りに対して近代化がもたらすインパクトは、一面的な合理化では捉えきれない多面性を有していることを示唆している。

このような、祭りの変化の内実を捉えるための分析概念として、K・ポランニーとR・カイヨワの「聖なるもの」と祭りの理論に基づいた祭りの歴史を再考察から、われわれは「オーソドクシー」「オーソプラクシー」という概念を得た。

あらゆる儀礼には、教義と実践の二局面が

あり、両者が合わさってはじめて儀礼として成立する。このうち、教義に対して忠実であることを「オーソドクシー(orthodoxy)」、実践に対して忠実であることを「オーソプラクシー(orthopraxy)」と呼ぶ。そして、祭りを儀礼としてみた場合、祭りの発達・変容は、祭りを支える教義(神聖性と関わる観念)と実践(祭り行事)との比重バランスの変化として把握することができる。例えば、日本の近世における都市祭礼が豪華絢爛な祭礼用車両である曳山と、大勢の人手を要する曳山祭を発達させてきたのは、脱宗教化に引き続き民衆化を経由することによって、儀礼としての両者の比重バランスが崩れ後者のオーソプラクシーへの比重を強めていく「オーソプラクシー化」が進行したことを示しているのである。

2. 研究の目的

本研究では、儀礼から近代化についての「合理化パラダイム」を問い直そうとする研究動向の一環として、祭りが近世から近代へといたる日本の近代化とどのように関わっていたのかについての事例収集をおこなうことを第一の目的とした。具体的には、日本の都市祭礼の典型と言える曳山祭(豪華に飾り立てた祭礼用の車両を曳行する行事へと発達した祭り)の近世 - 近代移行期(文化・文政期を中心とする近世後期から日清・日露戦争期を中心とする明治大正期にかけて)における変化と、その要因と思われる社会的(政治・経済)背景に関する情報収集をおこなう。そして、得られた情報をもとに、祭りの変化に対する近代化のインパクトについて分析する。

さらに、上記の知見を踏まえて、「合理化パラダイム」を修正・補完する近代化論の可能性についての理論的検討も目指した。

3. 研究の方法

曳山祭の展開過程についての情報収集は、地方図書館・資料館等における文献資料(史料)の収集、ならびに祭礼関係者・郷土史研究者へのインタビューを通しておこなった。その際に、近代化の下で存続・発展した祭りや衰退(中断)した祭りの双方について調査した。

近代化論の再検討については、国家論・儀礼論を中心とした理論研究をおこなった。

4. 研究成果

(1) 実施調査

調査は、いずれも少なくとも近世後期には都市祭礼としての発達を遂げ、現在でも規模や頻度の差はあれおこなわれている祭礼を対象とした。調査を実施した全祭礼のうち、祭礼関係者・郷土史研究者へのインタビューをおこなったのは14祭礼であった(下表参照)。

このうち、明治期以降、維新混乱期の一時

中断を除き、一定期間継続しておこなわれていたことが確認できた祭礼は9祭礼。明治～戦前にかけて、一時的な復活はあったにせよ、継続性がなく中断されたことが確認できた祭礼は2祭礼。さらに、明治期の継続の有無がわかっている11祭礼のうち、その動向が比較的明らかな祭礼は3祭礼であった。

祭礼名	調査地	継続
東照宮祭礼	名古屋	
熱田大山祭	名古屋	
若宮八幡宮祭礼	名古屋	?
神明社例祭	大館(秋田)	
花輪囃子	鹿角(秋田)	
東照宮祭礼	鳥取	×
聖神社神幸祭	鳥取	?
祇園会	山口	
天神祭	萩(山口)	×
住吉祭	萩(山口)	
山王祭	酒田(山形)	
大山犬祭り	鶴岡(山形)	?
三社大祭	八戸(青森)	
放生祭	小浜(福井)	

(2) 明治期の祭礼

明治期の動向が比較的明らかな3祭礼のうち、継続とその後の衰退を表す祭礼として山口祇園会の事例を紹介する。

・山口祇園会

室町時代の長祿3年(1459)に八坂神社の祭礼として大内教弘が京都の祇園会を真似て始めたと言われる同祭は、比較的早い段階から京都の祇園会風の山鉾が登場し、毛利藩主の萩転封後の江戸時代には町衆の商人たちの財力に支えられて山車や鷲の舞などが盛大に発達し、藩の重臣の代参と上覧や藩主寄進の巨大な「御上ノ山」など、藩の庇護の下にいわば官民一体の盛大な祭りとして発達していった。

明治の廃藩置県後、同祭は藩の庇護を失うわけであるが、同祭のシンボルともなっていた「千人挽き」の「御上ノ山」は「大江山」と名を変え若干規模をしながらも、明治20年までは曳かれるなど、18台の山鉾が出る盛大な祭りとしておこなわれていた。

また、この当時の祭礼日は江戸期以来の旧暦6/7-13と厳密に対応させていたため、毎年祭礼日が1ヶ月近くの幅で変動していた。これが変化するのが明治43年で、明治国家による新旧暦併記の廃止に伴って、これ以降祭礼日は新暦の7/20-27へと固定化される。同時にこの年、祭礼の神幸経路に電話線が架設され、神輿に伴って曳行されていた山鉾は置山として展示するのみとなった。

それ以降、江戸時代以来の華麗な曳山の曳行はなくなり、かわりに神社境内で「鷲替」と呼ばれる福引きが開催され、また御旅所付

近では移設動物園が開場されるなど、興行的催しが主役となっていく。同時に警察による治安警備も厳しくなり、明治45年には「据置の山は年々低く歳々粗造に」なり、祭りは「年々遜色を失ひ、次第に寂しさを現じて来る」と評されるまでになった。

(3) 祭りの意味論的構造

日本の祭りは千年以上にわたるその発達過程で、ほぼ共通の構造を獲得してきた。それを柳田は「祭り」と「祭礼」と呼び区別したが、この混乱を生みやすい呼び方をここでは「神事」と「神賑行事」の重層的構造と呼ぶこととする。すなわち、日本の祭りの基本構造は、神を祀る神社が主体となっておこなう神聖な行事(神事)を核とし、その周囲にあって、神事をもり立てる賑やかで華やかな演し物からなる行事(神賑行事)からなりたっているのである。

この、神事と神賑行事とのあいだの関係は、形式的には神事を祭りの核とし、神賑行事の効果は神事の神聖性を志向するものであり、その関係性は祭り参加者の誰にとっても自明であるはずである。また、神事における行事(神事事)は、神聖な事物・観念を直接的・必然的に指し示すが、神事にとって神賑行事は、本来のどのようなものであってもよく、特定の行事を必然的に指し示すことはない。それに加えて、神賑行事はあくまでも形式上は神事を指し示しているはずではあるが、非日常の演出のためにさまざまな資源を動員する関係上、実践的なレベルにおいてなんらかの世俗的価値を指し示すこともある。

祭りにおける神事と神賑行事とは、上記のような特殊な意味論上の関係を取り結んでいるのである。このような関係性は、青木保が紹介するタムバイアの「指標象徴(indexical symbol)」と「指標アイコン(indexical icon)」の概念を用いて一般化することができる。

パースの言語学において「象徴」とは、対象との類似や連関が一切なく、慣習的に結びつけられる記号を指し、「アイコン」とは、何らかの類似に基づいて対象を指し示す記号のことを指すが、「指標象徴」と「指標アイコン」の特徴は、いずれも2つの異なる次元の対象や意味を結びつける点にある。すなわち、「まず象徴であるが、慣習上の意味論的規則による表徴的对象と結びついていること、次に、それらは自らそれらが表徴する対象と実在的で実践上の関係をもつ指標である」という2つの性質を兼ねているのである。

これを上記の祭りの意味論上の関係にあてはめると、神事における神事事は、神観念を指し示す指標アイコンであり、その結びつきが直接的・必然的であるのは、それが指し示す対象が意味論レベル、実践レベルにおいて限りなく重なっていることを指す。それに対して、神賑行事は神事を形式上指し示すが、両者の結びつきには本質的な必然性はない。

神事としての神輿渡御に随伴するのが獅子舞であろうと、曳山であろうと、そこには意味論上の必然性はないのである。しかし、神賑わいが何のためにおこなわれるのかと言えば、あくまでも形式上は神事という祭りの中心への供奉のためである。その意味において、神賑行事は指標象徴として、一方では神事を意味論上指し示すが、同時に実践レベルでは行事主催・運営に対する関与の重要性に応じて社会的地位や威信・権力などの世俗的価値をも指し示すのである。

(4) 祭りの意味論的構造と近代化

では、祭りの意味論的構造に対して近代化はどのような影響を与えるのだろうか。そもそも社会変動とは、社会的な価値体系と社会的資源の布置状況の両面にわたる社会的変化ということができる。そして、近代化はこの両局面における根本的な変化であり、とりわけ日本社会にとってはそれが急速に進行した点に特徴がある。それだけに、祭りへの近代化のインパクトは一般的にラディカルな作用を及ぼしたはずである。

その作用は、神事に対しては主に価値体系の変化が、神賑行事に対しては社会的資源の布置状況の変化が、それぞれ大きく関わってくるが、神観念と関わるオーソドクシーによって営まれる神事は容易に変化の影響を受けないのに対して、そもそも政治・経済的条件をはじめとする社会的資源環境との関わりで発達してきた神賑行事はまさしく直接的な影響を被ることは明白であろう。そうすると、近代化は、とりわけ祭りの神賑行事が有する指標象徴としての意味論上の二重性に直接的な影響を与えることを通して、祭りの意味論的構造を揺さぶることになると考えられるのである。

・山口祇園会

江戸時代後期には「千人山」と呼ばれた藩主寄進の曳山をはじめとして、神賑行事がその豪華さ・大きさにおいて頂点にまで発達した同祭は、明治以降、藩の後ろ盾がなくなっても、商都としての繁栄を背景に継続されていた。それは、「雨が降らねば金が降る」と言われるほどの盛況であったという。

それが決定的に変質し、急速に祭りの衰退が始まるのが明治 43 年の祭礼日変更（固定化）以降である。このことから、明治後期までこの祭りが継続されていたのは、神社例大祭日であった旧暦 6/7-13 という日程を新暦採用以降も厳密に守り続けることで、指標象徴としての神賑行事の意味論レベルの指標対象があくまでも神事にフォーカスし続け、社会環境の変化のなかでも祭りの基本的な意味論的構造が維持されていたからと考えられる。

そして、新暦 7/20-27 への祭礼日変更（固定化）は、神賑行事の意味論レベルの指標対象がもはや神事ではなくなって世俗的なさまざまなものへと拡散していったことを示

している。祭りが神事との意味論上の結びつきを希薄化させ、神賑行事が雑多な催し物にとって代わられる商業振興祭の様相を呈し始めるのはこの頃からであり、それ以降、戦後に再興されるまでこの祭りからは曳山は姿を消すのである。

(5) まとめ

明治期の山口祇園会における神賑行事は、最終的に神事との意味論上のつながりが希薄な商業振興祭へと変化した。このことが示しているのは、近代化は祭りのオーソドクシー化を促すが、それは祭りの意味論的構造の変容を伴っており、それが祭りの衰退をもたらす場合もあるということである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 竜司 (Yoshida, Ryuji)

龍谷大学社会学部・教授

研究者番号: 10291361

(2) 研究分担者

田中 滋 (Tanaka, Shigeru)

龍谷大学社会学部・教授

研究者番号: 60155132

(3) 連携研究者

()

研究者番号: